

# 良く噛める・楽に噛める新しい咬合調整方法

## 歯科関係者の盲点 咀嚼運動の知識

軽井沢町てらお歯科医院 寺尾公成

歯科教育の中で咀嚼運動（動いている咬合）のことは教育されて来なかったと思います。少なくとも私は習いませんでした。セミナー参加者に聞いても何方も記憶に無いそうです。せいぜいプリントを渡されて『目を通しておくように』で終わりだそうです。歯科診療に携わりながら咀嚼運動の基本すら知らなくて済まされるのでしょうか？確かに知らなくても臨床をこなすことは出来ます。しかし時々遭遇する「何でこの歯が割れるの？」「何で隙間が開いてくるの？」「何で噛みにくいと言われるの？」「何で肩が凝るようになったと言われるの？」等の疑問はもしかしたら咀嚼運動を理解すると解決するかもしれません。

咀嚼運動の基本は大阪大学名誉教授丸山剛郎先生の研修会で学びました。丸山先生は日本の名立たる多くの先生方に影響を与えた先生です。そこで習った咀嚼出来るスプリント（MDA と命名）を 100 個以上作るにより独自に良く噛める楽に噛める方法を編み出しました。それは分かってしまえば当たり前で「な～んだ！」と言うことですが、今までの咬合の常識に囚われているとなかなか理解出来ないようです。

実は誰もが現状を噛みにくいと自覚しているわけではなく、多くは補綴物を入れる時だけ自覚する現象です。技工士にとって自分の作品の価値が問われる瞬間ではないでしょうか？歯科医師が調整方法をご存じなくても最低限の調整で良く噛める補綴物が装着出来たなら「腕の良い技工士」になれるでしょう。その時きっとその患者さんの首肩凝りも軽減されているものと思います。

キモは模型の触診ですので、その意味で何時も模型を触っている技工士さんが理解にもっとも近い位置に居るものと思っています。技工士さんに理解して貰えれば噛み易い補綴物が作れるようになり、患者さんが楽になり歯科診療を通じて国民の健康に寄与出来るのではないかと考えています。